令和6年度学校評価（最終）

学校名（宮島小・中学校）

評価計画				自己評価					コメント	改善方策	
中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	評価項目・指標	目標	中間8月	最終2月	達成	評価			結果と課題の分析
小中一貫教育のよさを最大限に生かす学校運営	4・3・2制のメリットを生かして、9年間で育てる。	コミュニケーション能力(助け合い・認め合い・支え合い)を育成するために、ブロック活動を充実させる。	「ブロック目標を達成することができた。」と答えた学園生の割合(4・7・9年)	80%	【前期】 93.3%	【前期】 86.4%	【前期】 108	【前期】 A	【前期】 ブロック朝会やレク、学校行事との関わりの中で活躍できる場を設定したり前期生が助け合い、よさを認めて自分の活動に取り入れられたりすることができた。しかし、1つ1つの活動に対し学園生が達成感を味わえる時間が少なかった。 【中期】 中間の数値とあまり変わらないが、ブロック目標である「折り合いをつけてコミュニケーションをとることができる」を多くの場面で意識させたことで、より高いレベルを目指すことができた。 【後期】 日々の生活の中でほとんどの学園生が互いを認め合う行動ができています。個人目標の設定やその振り返り、集団の中で自分の役割を意識させることで、後期生としての自覚が高まった。	ブロック目標について、できている学園生が見えるようになった。上級生が下級生に教える場面をよく見た。教える場面を増やすことで、中・後期のブロックの学園生の力が伸びていき、自信につながるような取組にしてほしい。	各学年のつながりを持たせることができるような交流の場を仕組むなど4年生が主体的に活動できるような計画をしていく。また、目標に対し、定期的な振り返りの場の設定と達成感や充実感が味わえるような声掛けをしていく。 ブロック朝会や中期合同体育などの縦割り班活動で、ブロック目標や個人の学園生の力が伸びていき、自信につながるような取組をしてほしい。 ブロック朝会を通して、8・9年生の交流を更に充実していく。行事や諸活動の中でリーダーシップがとれるよう支援していく。
			「ブロック目標を達成しよう」と意識することができた。」と答えた学園生の割合(1・2・3・5・6・8年)		【中期】 89.5%	【中期】 90.4%	【中期】 113	【中期】 A			
			「ブロック目標を達成しよう」と意識することができた。」と答えた学園生の割合(1・2・3・5・6・8年)		【後期】 85.1%	【後期】 87.5%	【後期】 109	【後期】 A			
地域の財産(歴史、文化、自然)を学ぶ教育体系の確立	自己の将来、宮島の将来を考える力を育てる。	主体的・協働的に課題を解決する力をつけるために、対話を通して考えを深めさせる。	「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と答えた学園生の割合	70%	84.4%	83.3%	119	A	・低学年(1～3年)の肯定的評価が若干下がった。1学期に比べると、話し合いの内容に高いレベルを求めるようになったことが理由と考えられる。 ・各教科で学習したことを次の単元や他教科に関連させて指導をした成果だと思われる。特に、総合的な学習の時間では、各教科の学習を通して身につけた知識や技能、考え方などを様々な場面で活用する姿が見られた。	学校で学んだことが生活に結び付いているということ子どもに家で話題にさせることで、もっと深まっていこうと思う。先生が声かけをしてほしい。	学んだことを生活や学習に活かせるように、関連付けた指導を継続する。そのためには、教師が常に中・長期的な見通しをもって学習指導に臨む。
			「授業で学んだことを生活や他の学習で活かしている」と答えた学園生の割合	70%	84.4%	90.0%	128	A			
多様な学園生の育ちの場の提供	基本的な生活習慣(あいさつ)の確立をさせる。	発達段階に応じた行動目標を児童生徒に提示し、その姿を日々評価する。	「あいさつは、自分から進んでします。」と答えている学園生の割合	90%	92.6%	89.3%	99.2	B	・あいさつについては、偏りなく前・中・後期、平均的に低下していった。あいさつ運動の順番が前期→中期→後期となっていたため、後期生が最初にお手本を見せる等の工夫をする必要があった。 ・スペシャルサポートルームという不登校、不登校及び支援が必要な学園生への支援を行う部屋の活用ができています。 ・教育相談連絡会(歩く会)で検討したことの周知方法をデジタル化したことで、全教員に迅速に周知することができた。 ・認め合える集団づくりを進めていくために、掃除(縦割り班)のふり返りの視点を他者に向けた必要がある。	年度当初と比較して明るく大きな声であいさつしてくれる学園生が増えた。地域や家庭でもあいさつを交わす習慣をつけていくことが必要である。あいさつは社会に出るときに必要なので、成果を上げてほしい。	・ベア学年を作って、あいさつ運動をする。望ましい姿(大きな声・相手の目を見るなど)を低学年に意識づける。 ・教育相談連絡会の周知方法をICT支援員と連携し、校務支援システムが現在の周知方法より迅速にできるのであれば実践する。 ・掃除のふり返りの視点を他者に向けて認める集団をつくっていく。 前期：自分のがんばったところ。 中期：仲間のがんばったところ。 後期：全体を見渡して掃除や声かけができたか。前中期生の反省内容について。
	多様な価値を受け入れ、認め合える集団をつくる。	学園生の特性に応じた支援について外部の専門家と意見交換し、内容や支援方針を全教職員で共通理解する。	「宮島学園は、安心して過ごすことができる学校です。」と感じている学園生の割合	90%	94.8%	94.0%	104	A			
ワークライフバランスのとれた元気の職場	目的やスケジュールを意識することで、組織的な取組を実施する。	目標達成に向け、行事のスケジュールを意識し企画運営委員会、分掌会及びブロック会を計画的に実施し、状況を共有する。	タイムマネジメントを意識することで、「時間に余裕をもって業務することができた」と感じている教職員の割合	67%	81.3%	66.7%	99.5	B	・今学期も、事前に教頭が行事予定や書類提出日を伝えたり、予定が一目でわかる表を提示したりすることで、時間に余裕をもって作業することができた。2学期に学校行事が多く、また新たな取組が入ってきたりして見通しが持たなくなり、担当する教職員の負担が大きい場面があった。 ・学園生の成長している姿や学校行事の取組に対して、管理職を中心に、肯定的な評価をした。また、困り感を企画運営委員会と共有し、助け合う風土づくりと呼び掛け、各教職員が実践した。	「宮島で働いてよかった」と感じている教職員の割合が90%に近いので、先生方はやりがいを感じて働いていると思う。教職数が少ないので、1人に負担をかけないように協力できる体制があるとよい。	・事前に教職員に伝えていく取組を継続する。 ・来年度に向け、教育計画や校務分掌の見直し、学校行事の精選を行う。 ・今年度実施した内容について、次に仕事をする人がわかりやすいようにフォルダ等に蓄積・整理をする。 ・困り感を共有し、同僚性を高める。
			「宮島学園で働いてよかった」と感じている教職員の割合	90%	87.5%	87.5%	97.2	B			

※ 「評価」の項目については、「達成度」は「報告期の数値/目標値」である。「目標値」に対する「達成度」をA～Dで評価する。(A:100% B:80%以上 C:60%以上 D:60%未満)

逆転項目の評価については、A(目標値以下) B(目標値～前回数値) C(前回数値より悪化)とする。